
全てを見透かす男

アルトアイゼン・リーゼ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

全てを見透かす男

【Nコード】

N4193Y

【作者名】

アルトアイゼン・リリーゼ

【あらすじ】

ある中学の3年だった俺はある時授業をサボって屋上で昼寝をしていた

それが俺の人生を変えた

その人の力になりたい

その人一緒に居たい

俺は彼女について行った

そして3年後俺達は次元を越える事になる・・・

始まり

ある所に男が居た

白く銀に靡く髪

青と緑の美しい瞳

背が高く200センチほど

赤と所々赤いラインが入っている衣類を着用している

「心」

彼は振り向くと仲間であり上司である人が居た

「昔の名で呼ばんでください俺はその名を捨てたんですから」

「ふふふごめんねだって此所始めて貴方と出会った場所だから・・・」

「

そこは中学校の屋上

ここで二人は出会った

「最初の出会いは酷かったわね」

「ええ、あの時は俺も青臭い中3でしたから」

「そうよね、剣を1本私から奪ったはいいけどただ振り回すだけだったものね」

「まああの時は餓鬼でしたからね」

「でも今は違うわ」

彼女の顔は一瞬にして真剣になり俺を見つめる

「貴方には本当に感謝してるわ貴方のおかげでスレードゲルミルが

完成してんだから」

「でもまさかあれを本当にパワードスーツサイズに再現するして
尚且つ待機状態がアクセサリーってなん凄すぎますよ」

「そう言う心もダイゼンガーとガオガイガー作ったじゃない」
「う・・・」

「まあどっちにしる貴方の愛機に代わりはないわ」

「ええ、これでやってやりますよメイガスの剣としてね」

「期待して・・・るわよ？ウォーダンさん」

「今の間なんですか？」

「なんでもないわよ」

「そろそろ行こう、見回りがくる」

「流石元生徒ねここの」

彼は光に包まれ光が収まるとそこには白がベースで

方には赤と黄色の宝石のような装飾がされ

腕は太く青く中央に赤い宝石が付いている

背には赤く黒のラインが入ったドリルが付いている

ドリルを回転させ彼は飛んだ

これから彼の物語が始まる

次元転移 愛機の変化

俺は俺の上司であるセリーヌ・メイガス様のしたで働いている
俺の役目は戦争、紛争に介入し止めること

これまでに50という戦いを違う形で終わらせてきた
が俺も追われる身となってしまった

覚悟はしていた

実際と覚悟はそれほど違いはない

そして俺は新たな世界に旅立つ事になった

「セリーヌ様、準備はできました」

「此方もOKよ」

俺は最低限必要であろう荷物を持ちある装置の上に立つ

「これでこの世界との別れか・・・」

「あら？名残惜しい？」

「いえそう言う訳では」

「じゃあ行つて、私も準備が出来次第向かうわ」

「承知、あまりご無理はなさらないでくださいよ」

「あら？心配してくれるの？」

「我は貴方の剣です」

「あらあら剣に心配されちゃうなんてね・・・じゃあまた会いましよう
ウォーダン」

「ええ・・・セリーヌ様・・・」

そして俺は光に包まれセリーヌ様の顔も見えなくなつた
俺は自然と目を閉じた

そして目を開くと・・・俺の体は何か固定されていた
そして・・・見えるのは・・・暗黒の宇宙・・・

そして指あるのはガオガイガーのリングのみ

スレードゲルミルのイアリングがない

・・・だが代りにスレードがとダイゼンカーが巨大化している

俺はダイゼンカーに乗っているようだ

「どうなってるだ・・・？・・・スレードはこれほどかくはなかつたはず・・・」

ガオガイガーだけこのままというのも謎だ・・・操縦の仕方は・・・

「

腕を動かすとダイゼンカーの腕も連動して動いた

「・・・なるほど・・・ダイレクトに動きを伝えるのか・・・

スレードはどうするか・・・システム回線スレードに同調・・・」

ダメ元で声で試してみる

ピピッ

『了解、スレードゲルミルとの回線を出します』

「マジか・・・」

俺の前にスクリーンが出た

・・・基本的前と同じだな、よしオートパイロット起動

スレードのツインアイに光が灯った

とりあえず場所の移動にかかった

スレードはダイゼンカーに続く

しばらく航行していると戦闘の光が見えた

「あれは・・・」

アニメで見たことがあるMAと呼ばれる奴だ
それと戦闘してるのは・・・戦艦と・・・人型の機動兵器か・・・

「状況から見て・・・数で不利な方を援護するか」

一気にスラスターを吹かし戦場に入入する

「ああん！？何だお前はあ！！」

「我はウォーダン、ウォーダン・ソウル！悪を断つ剣なり！」

リニアカノンを放ちながら大量の敵が突撃してくる

「ゼネラル・ブラスタアア！！！」

肩から熱線を放射し攻撃する

かなりの敵がゼネラルブラスターに飲み込まれ消えた
スレードもドリルブーストナックルで攻撃を仕掛ける
ゼネラルブラスターで減っていた敵が更に減った
パイロットは・・・脱出しているな

「ちつくしよー！！おぼえてろよー！！！」

残ったMAにつかまりゆつくりと撤退していった
すると戦艦から通信が来た

『戦闘中の援護感謝するできればお礼がしたいのだが・・・』

「では着艦してもいいか？此方としても情報がほしいのだが・・・」
『もちろんだではハッチを開けよう』

するとハッチが開き先に戦艦の所属の機体が入って行った
遅れてダイゼンガーとスレードもハッチに入った

すると下の方に数名の人が見えた

俺はハッチを開き機体から降りると真っ直ぐとした目で俺を見定めるかの様に見る男に

緑色の髪をしている幼い女の子に

茶色の髪をし頬にばんそうこうをしている男の子

明るい茶色の髪をした女性

黒い長い髪をした女性達がいる

「先ほどは援護感謝します、私はこのヴァルストークファミリーの代表

ブレスフィールド・アーディガンですどうぞよろしく」

「俺の名前はウォーダン・ソウルです」

握手を交わす

「勝手に戦闘に介入してしまつて申し訳ありませんでした」

「いえ此方はそれで助かりました」

「援護ありがとよ俺はカズマ・アーディガンだ！よろしくなソウルさん」

「よろしく」

「わ、私はミヒロ・アーディガン／／／／／」

「よろしくね」

「シホミ・アーディガンですオペレーターをやっています」

「よろしくお願いします」

「アカネ・アーディガンよ」

「よろしく」

「まあ挨拶はこれでいいでしょう、君はいったい何者なんだい？」

「・・・どう言ったらいいでしょう・・・俺は・・・」

みんなの視線が俺に集中する

「・・・旅する浪人といった所ですかね・・・？」

「「「「「浪人？」「「「「」」」」」」

「ええ家族に家を追われて研究開発中であつたダイゼンガーとスレードゲルミルを持ち出し
なんとか生きてきました」

「家を追われたつて・・・どうして・・・」

「お兄ちゃん！！」

「あ・・・ご、ごめんなさい・・・」

「いえ・・・疑問思うのは当たり前でしょう・・・」

俺は・・・家族の中で唯一人・・・孤立していました・・・

そしてある時俺が剣を握った時に恐ろしいまでの力を使ってしまい
家族は俺を恐れました、俺を殺そうとまできました」

「な、なんで！！！！」

「恐怖と言うのは自分の命を守ろうとする大切な物
それが命を守るために自分の命を危険さらすものを消してしまえと
いう指令が送られたんです・・・」

「そ、そんな・・・」

「ソウルさん・・・」

皆は俺に同情の目と悲しみと哀れみを向けてくる

「そんな目をしないでください・・・もうどうでも良い事です・・・」

「

因みに殺されそうになったのは本当の話だ

「よくありません!!!」

ミヒロちゃんが大声をあげた

「ミ、ミヒロ？」

「だって・・・家族に・・・そんな事あっていいはずありません！
！」

「もういいだよ・・・俺は今までもこれからも・・・あの人に・・・
いえ・・・一人で生きていきます・・・お話ができてよかったです
有難うございました・・・」

俺はダイゼンカーに向かう

「待ちなさい」

プレスさんに止められる

「何ですか？」

「行く当てはあるのか？」

「いえありません・・・」

「なら此所にいるといい」

「・・・え？」

俺はセリー又様に同じ事を言われた

『なら此所にいなさい』

「でも・・・ご迷惑になるのでは・・・」

「大丈夫だ、だが働いてはもらうぞ」

「・・・でも・・・」

「ソウルさん！ここで暮らそうぜ！」

「カズマ君・・・」

「そうですよ！」

「ミヒロちゃん・・・」

「男手があると此方も頼もしいしな」

「本音はそっちかよ！オヤジ！！」

「冗談だ」

こうして俺はヴァルストークファミリーに一員となった

俺の役目

俺はヴァルストークファミリーの一員になった
が何をすればいいんだ？

「プレスさん俺は何をすればいいですか？」

「・・・何が得意だい？」

「・・・料理に掃除に洗濯に裁縫にデスクワークに力仕事にオカリ
ナにマッサージに
プログラミングに・・・」

指折りしながら数える

「ソウルさん・・・すげえ・・・」

「主婦スキル満点じゃない・・・」

「なかなか出来ることが多いな・・・では手始めに今日の夕食を作
つてくれないか？」

「はあ？何言つてんだよオヤジ今日の当番俺だろう？」

「お前の料理もいいがウォーダンの料理の腕前も気になるのでな」

「確かに・・・」

「あたしも気になるな」

「私も」

「私も・・・」

「わかりました腕によりを掛けて美味しい物を作らせていただきま
す」

「楽しみしてるよ、それよりその喋り方を止めたらどうだい？」

「！！気づかれた！？」

「何の事でしよう?」

「惚けるな何か喋りずらそうだったからね」

「やれやれ・・・バレてしまう物なのか・・・まあいいかでは調理に入ろう」

「・・・でキッチンはどこに?」

「あ・・・わ、案内します／／／」

「頼む」

俺はミヒロちゃんの後につきキッチンに向かう

「「うう／／／ウオ、ウォーダンさん格好良すぎるよ・・・／／／／」

私・・・恋・・・しちゃったのかなあ?」

主人公設定

虚無 心↓ウォーダン・ソウル

年齢 15歳↓ 19歳

身長 200センチ

体重 99キロ

容姿 ゼンガー・ゾンボルト

中学3年のある時気分が優れず学校の屋上で昼寝をしている時にセリーヌ・メイガスと出会う

姿を見られたという理由で戦闘になるが

勝負は一方的な物であり捨て身の賭けで剣を一本奪ったのはいいが敗北

その後セリーヌに誘拐され彼女の研究設備で一命を取り留める
そこで

「私とこの世界に介入してみない？」

と誘われ持病であるアトピー性皮膚炎の治療をしてけると条件を付けたため承諾

訓練をしながら治療をした結果完治はしたものの容姿が変化してしまった

以前は下の下だったが『ゼンガー・ゾンボルト』の容姿になる

セリーヌが作り上げた機動兵器『スレードゲルミル』の所持者

更には自身で『ダイゼンガー』と『ガオガイガー』を作り出す天災

この3つを使い戦争や紛争に介入し戦いを止めてきた
性格は冷静でクール稀に冗談を言う

家族からは異物扱いされ殺されかけた過去を持つ

料理・掃除・洗濯・裁縫・デスクワーク・力仕事・オカリナ・マツ
サージ

プログラミングが得意というある意味でのチートスキルを持っている
Gクリスタルが認めたGストーンの適合者

体内にはGストーンが取り込まれている

スレードゲルミル

セレーヌが研究開発した兵器

待機状態はISのようにアクセサリーのようにになっていた 「ハイア
リング」

マシンセルによる自己修復機能により多少のダメージは瞬時に修復
することが可能

さらに単独飛行能力も持つ

背部のスタビライザーによって安定した飛行性能を持つほか、ドリ
ルのみの射出攻撃や

ドリルを装着しての格闘戦もこなせる

遠距離武器がないためライフルが追加された

武装

ドリル・ブーストナックル

反転式スタビライザー兼ドリルクラッシャーを装着し発射するブー
ストナックル

ATS（自動追跡装置）による追尾のほか、パイロットによるマニ

ユアル誘導も可能

腕に装着したまま格闘武器として使用できる

装着せずブーストナックル単体またはドリルクラッシャー単体で射出、攻撃することも可能

斬艦刀

斬艦刀がマシンセルによって強化されたもの

両肩に二口装備されている

肩部装甲の一部（縁にある棘状の部分）が剥離・反転した後に

長大な柄が現れて鐔と柄を構成、鐔からさらに長大なマシンセルの刃が伸びる事で完成する

スレードの主力武装

ウォーダンは好んで斬艦刀を使う

インフェルニテス

斬艦刀同様に肩に装備されており、剥離・反転し使用する

高速連射が可能で斬艦刀に負けず劣らずの威力を誇る

ドリル・インフェルノ

頭部の打突用兵器である超硬度インパクト・ヘッドは直接攻撃の他に対物排除フィールドに似た力場を発生させ、それを回転させ攻撃することが可能

連続で相手に打ち付ける頭突き

斬艦刀・電光石火

強力な突きによる衝撃波

斬艦刀・一文字斬り

斬艦刀・星薙の太刀

ほしなぎ

刀身をエネルギー化し、さらに巨大な斬艦刀とし、地表もろとも標的を薙ぎ払う

ダイゼンガー

ウォーダンがスレードを元とし作り上げた機体
待機状態はブレスレッド

剣撃戦に特化しておりパワー、装甲ともスレードに引けを取らない
スレードより此方を使う事が多い

武装

斬艦刀

必殺技使用の際、形状が鉞状や巨大な両刃剣に変化する。

ダイナミック・ナックル

スレード同様にATS（自動追跡システム）を搭載し、パイロットによる手動操作も可能

ゼネラル・ブラスター

重力場による仮想砲身から発射される熱線

ガーディアンズ・ソード

斬艦刀よりもやや小振りな片刃の剣で、取り回しは軽い
刀身がGの形になっている

必殺技

斬艦刀・電光石火（・・・でんこうせっか）

斬艦刀の刀身を形成するためのゾル・オリハルコニウム形状固定用

エネルギーを剣先に集中させ放つ

斬艦刀・大車輪（ - ・だいしゃりん）

ククリ刀型にした斬艦刀をブーメランのように投げつける

斬艦刀・雷光斬り（ - ・らいこうぎり）

敵を一瞬の間に十字に切りつける

斬艦刀・疾風怒濤（ - ・しつぷうどとう）

斬艦刀・雲耀の太刀（ - ・うんようのたち）

斬艦刀を大上段に構え急上昇し、落下の速度を加えて一気に振り下ろす必殺技

「雲耀」とは「雲が耀^{かがや}く」という字のごとく稲妻のことで

示現流では研ぎ澄ました鍔が薄紙を貫くまでの間の時間を意味しつまりは剣速が電光石火のスピードに達した状態を指しているを指している

ジェネシックガオガイガー

ウォーダンが作り上げた史上最強の破壊神

パワー、出力、装甲が他の2機を上回る

「最強の破壊神にして勇気の究極なる姿」と称される

セレーヌが過去に発見した無限情報サーキットGクリスタルを用いて開発した物

解析、分析が不可能だったが心が触れた瞬間解析が可能となり

そのままガオガイガーのコアユニットに用いられている

髪の毛状の“エネルギーアキュメーター”

無限波動であるジェネシックスオーラの鎧“ジェネシックスアーマー”
グラビティ・ショックウェーブを放つゴルディオンネイルなどなど
人智を越えたテクノロジーが組み込まれている

3機に中最強であるが使うことは少なく扱える人間はウォードンのみ
待機状態は指輪

展開時はそのままガオガイガーになるか

ファイナルフュージョンするかの2択になる

機体装備

ブロウクンマグナム

拳の部分のみを発射する

見た目はシンプルながらもかなりの攻撃力と追尾性能を併せ持つ

プロテクトシールド

絶大な防御力を持つバリアを全方位に展開し敵の攻撃を防ぐ

スパイラルドリル

粉碎力に優れ、広域破壊に適している

衝撃が広範囲に渡って拡散する性質上、局部破壊には不向きであり
単純な攻撃力ではストレイトドリルに劣っている

ストレイトドリル

貫通力に優れ、局部破壊に適している

衝撃を一点に集束させる性質上、広域破壊には不向きだが

単純な攻撃力ではスパイラルドリルを上回る

ドリル本体はパワーが先端部分に集中するため側面からの攻撃には
脆い

ジェネシックスアーマー

-

ジェネシックオーラで構成されたバリアで装甲表面に張り巡らされている

エネルギーアキュメーター

頭部にみられる髪の毛の状のパーツ。

ゴルディオソネイル

両手の指10本の先端に設けられており、形状は大きく異なる局所的に重力衝撃波を発生させ、触れた物質を光に変換する

ガジェットフエザー

ガジェットガオーの持つ四対計八枚の可変翼
高い機動性を生み出す。

ガジェットツール

ガジェットガオーの頸部の分割と合体により形成される
ジェネシックガオガイガーの補助ツール

ウィルナイフ

ガジェットガオーの頸部の第1節（頭部）が変形したツール
ジェネシックの右手に装着され、主に局部破壊に使用される
搭乗者の意思によって切断力を変えることができる

ボルテイングドライバー

ガジェットガオーの頸部の第2節と3節が連結し、変化したツール
ジェネシックの左手に装着され、主に広域破壊に使用され
各ジェネシックマシンから発射される3種のボルトを使用すること
により

その効果を変えることができる
ジェネシックボルトはジェネシックオーラの無限波動を湾曲空間を

通して

直接目標にぶつけることにより対象物を半永久的に内部分解へと導き続ける広範囲攻撃となる

また、劇中未使用のブラウクンボルトとプロテクトボルトの効果はそれぞれ内部爆発とドライバー系ツールと同じ空間湾曲の効果を持つ

必殺技

ヘル・アンド・ヘヴン

ガジェットガオーの頸部の第5節と6、7節が変形したツール

ヘル・アンド・ヘヴン使用時に両手に装着され、ヘル・アンド・ヘヴン

敢行時の衝撃から両手を保護するナックルガードである

ジェネシックガオガイガーのヘル・アンド・ヘヴンは

「ヘル・アンド・ヘヴン・アンリミテッド」

もしくは真のヘル・アンド・ヘヴンである「ヘル・アンド・ヘヴン・ウィータ」という名称

こちら真のヘル・アンド・ヘヴンの効用は、対象物の純粋な破壊であり

発動時にはその破壊を阻む事は不可能な程の威力を誇るが

使用後に推進系出力が低下し、僅かに隙が生じる弱点もある

さらに、全身を保護しているジェネシックアーマーも消失してしまう
諸刃の剣とも言える

日誌

・・・ソウルさんが俺達ヴァルストークファミリーの一員になって1週間となったがソウルさんには驚かされるばかりだ

料理は半端なく美味い・・・姉さん達は

女の一部分を破壊されたと言ってた

掃除に関しては・・・なんで雑巾だけでピカピカになんの？

いろんな部屋や通路はソウルさんが掃除したらピカピカのテカテカマツサージは俺もやってもらったけど気持ちよすぎ！

10分ぐらいやってもらったけど全身の疲れが吹っ飛んだ

親父達もやってもらった結果全員が淫らな顔になっていた

恐ろしいな・・・ソウルさん・・・俺始めて現実「リアル」チートを見た気がする

それにしてもソウルさんはいい人だ！

話とかするんだけど気づけば俺の愚痴話になってるんだけど

嫌顔しないでつと言うか真剣に聞いてくれたり楽しそうに聞いてくれたりしてくれた

でも気になる事あるんだ

ソウルさんはまったくと言っていいほど自分の事を語らない

自分を持ち上げたりしない寧ろ自分を汚すような言い方しかない俺も

「ソウルさんあんたいい人なんだからさ自分の事を汚さない方がいいぜ？」

って言ったんだけど・・・

「・・・無理だ・・・」

その一言で済まされてしまった
親父にも相談してみたけど

「そつとおいてやれ」

としか言わなかった

何だよ親父！もつと気にかけるよ！

俺はソウルさんの昔の事が知りたくなっただけで途中で気づいた

始めて会った時に言った言葉を思い出したんだ

「ええ家族に家を追われて研究開発中であつたダイゼンガーとスレードゲルミルを持ち出し
なんとか生きてきました」

「家族の中で唯一人・・・孤立していました・・・
そしてある時俺が剣を握った時に恐ろしいまでの力を使つてしまい
家族は俺を恐れました、俺を殺そうとまでしました」

・・・家族に殺されかけた・・・そんな過去を掘り起こそうとする
俺が一番最低なのかもな・・・
ソウルさん・・・そうだ！なら今度は俺が！嫌俺達ヴァルストーク
ファミリーが幸せな時を
作ってやろう！そうすれば少しでも気が楽になるはずだ
よおし！このカズマが良い思い出を作つてあげますぜ！
つと奮起する俺が居たつと・・・」

カズマは日誌を書き終えるとベットに寝転んだ

「・・・あつそういえばソウルさんペンダントしてたよな？」

どこで買ったんだ？あれ欲しいな」

っと言いながら眠りに付くカズマだった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4193y/>

全てを見透かす男

2011年11月24日01時48分発行